

■ 世界株高でリスクオンのムードが復活しドルは堅調！

今週に入って昨日（5日）まで、NYダウ平均は3日で1000ドル超の上昇を演じることとなった。強い、強い、とにかく米国株が強い。足下では、いまだ新型コロナウイルスの感染拡大が止まらない状況であるにも拘らず、なんとナスダック総合指数に至っては「2日連続の史上最高値更新」である。

一つには、春節休暇明け（3日）に一旦大きく値を下げた上海総合株価指数が下げ止まり、後に反発してからは基本的に強含みで推移しているということがある。むろん、これは中国人民銀行が1兆2000億元（約18兆6000億円）の資金供給を行ったことに加え、中国政府が一段の景気対策を準備しているなどと伝わったためで、それは国際金融市場全体のムードを改善することに大きく貢献している。

今一つに昨日（5日）、英スカイニュースが「英研究チームによる新型コロナウイルスのワクチン開発に大きな進展があった」と伝えたことも世界的な株価回復に一役買っている模様。順調に行っても臨床試験に移行できるのは今夏のことだが、研究チームを率いる英インペリアル・カレッジ・ロンドンのロビン・シャトック教授は「（ワクチン開発が夏以降になっても）手遅れということにはならない」などと述べたようだ。事ここに至っては、数多くの研究機関が世界中で抗新型ウイルス・ワクチンの開発にしのぎを削っているとされ、今後は本件以外にも有望な案件が次々に出てくるものと期待しておきたい。

とまれ、足下の市場にはリスクオンのムードが戻ってきており、結果的にドル/円は再び110円台を伺う強めの動きとなってきている。ちなみに、ドル/円の109.80円処には現在、一目均衡表の週足「雲」上限が位置しており、目先は同水準をクリアに上抜けられるかどうかが一つの焦点となっている。上抜けた場合には、いよいよ2015年6月から長らく形成されている三角保ち合い（トライアングル）からの上放れに再チャレンジすることとなる。これに成功すれば、一つには昨年4月高値の112.40円が視野に入ってくるだろうし、少し長い目では、かつて長らくドル/円の上値を押さえ続けた114円台半ばあたりの水準が意識されるようになってもおかしくはないと見る。

ここはウイルス感染の一層の拡大を警戒して一時的にも大きく下げ過ぎた米10年債利回りがジワジワと持ち直してきていることにも注目しておきたいが、何よりユーロ/ドルの弱気が足下で再び鮮明になってきていることは見逃せない。

既知のとおり、ユーロ/ドルは先週31日に一旦1.1100ドル付近まで大きく上昇する場面があったものの、週明け3日以降は先週末にかけての一時的な上昇をすっかり打ち消す格好となっている。やはり、31日は週末と月末が重なったことで、手持ちのポジションを一旦整理しておこうとする向きが多かったために、一旦ユーロが買い戻されたと見るのが妥当であろう。加えて、今週3日時点の1.1100ドル付近には21日移動平均線や日足「雲」下限、それに31週移動平均線などという必要な節目が複数重なっていたということもある。

もちろん、依然としてユーロ圏の域内景気に改善の兆しが見えてこないということが何より大きいことは言うまでもない。先週31日、欧州連合（EU）が発表した10-12月期のユーロ圏実質GDP（速報値）は前期比+0.1%（年率換算+0.4%）という無残な結果であった。中心的存在であるドイツで製造業を中心に時間短縮勤務を導入する企業が増え続けており、受注激減&生産調整の傾向が一段と強まってきていることも大きいと見られる。

また、ジョンソン英首相がEUとの将来的な貿易関係を巡る話し合いの場で、相変わらずの強硬姿勢を貫いていることにより、ポンドの上値が重くなっていることにも要注意と言える。言うまでもなく、英国とEUが通商協定で合意できないまま年末を迎えたら、結局は「合意なき離脱」が現実のものとなり、双方に甚大な経済的ダメージが生じることとなる。

さしあたり、ユーロ/ドルが1.1000ドル処をクリアに下抜けるかどうか注目し、下抜けた場合は一段の下値リスクに備えたい。

（02月06日 10:50）